６月１５日（日）マルコの福音書６章３２～３６節
「彼らが羊飼いのいない羊の群れのようであったので、イエスは彼らを深くあわれみ、多くのことを教え始められた。」(34 節)

イエス様が弟子たちに休みなさいと言われたにもかかわらず、多くの人々が先回りして、彼らよりも先に目的地に着いてしまいました。それらの人たちのために、せっかくの休みが台無しになってしまいそうです。皆さん方であればどう思われるでしょうか。３５，３６節で弟子たちがイエス様のもとに来て訴えている姿からも、彼らのうんざりした様子とイエス様に対して抗議をしたい気持ちが、見え隠れしているように思います。結局、彼らが見ていたのは、自分たちが休みたいということと自分自身でした。一方で、イエス様が見ていたのは群衆であり、その群衆を見て「彼らが羊飼いのいない羊の群れのよう」だと思われたのです。パリサイ人や律法学者など、人々に教えを語る者たちは大勢いたとは思いますが、人々に神の国の福音を教え、福音を信じるように導く人はいなかったことでしょう。そこでイエス様は、「多くのことを教え始められた」とありますが、神の国の福音を語られ、ご自身を信じることを通して神の国へ人々を導こうとされたのです。そして、イエス様の行動の動機は、深いあわれみであり、イエス様が人々と接する時には、常に深いあわれみに満たされていたことが分かります。

私たちもイエス様と同じ視点を持つ者でありたいと思わされます。そして、私たちもイエス様が持っておられた周りの人々に対する深いあわれみを持たせていただきたいと願います。それは、私たち一人一人が十字架の上で表された深いあわれみを知らされた者たちであり、イエス様の十字架のみわざを信じ、受け入れた時に、そのあわれみを私たちも受け取っているからです。

６月１６日（月）マルコの福音書６章３５～４４節

あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」(37 節)

３５，３６節の弟子たちの発言を見ますと、彼らはイエス様のもとに集まっていた群衆の必要に気がついていました。それは、このままだと群衆が空腹で飢えてしまうということです。その弟子たちに対してイエス様は、群衆に自分たちで食べ物を買わせるのではなく、「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」と言われました。イエス様の弟子には、常に受けるのではなく、与えることが求められています。そして使徒の働き２０章３５節にもありますように、与えることの幸いをいつもおぼえる者でありたいと思わされます。

そしてイエス様も弟子たちが大勢の群衆に、４４節を見ますと男だけで五千人もいる人たちに食べ物を与えられるとは思っていなかったことでしょう。実際に弟子たちも「私たちが出かけて行って、二百デナリのパンを買い、彼らに食べさせるのですか」と言っていますが、現実的に無理だということを弟子たちも分っていました。それではイエス様はなぜこのようなことを言われたのでしょうか。まず人々の空腹という目の前の必要に自分には関係ないとは思わず、目を向けさせる意味がありました。二つ目が、自分たちの無力さを知り、自分自身に絶望させることです。三つ目が、自分の無力さに絶望したなら、今度はイエス様が力あるお方であることを知り、そのイエス様に助けを求めさせようとしたことです。実際に、イエス様は五つのパンと二匹の魚をもって、男だけで五千人の人たちを満腹にさせ、なおもパン切れを十二のかごに集め、魚の残りを集めることができたほどに、多くのものを与えることのできるお方だからです。

私たちは、必要に気がついても、自分の無力さを嘆くか、あきらめるか、自分には関係ないとばかりに見て見ぬふりをすることはないでしょうか。しかし、自分の無力さを知ることは信仰への第一歩です。自分の無力さを知らされたなら、その時にこそ私たちは信仰を持ってイエス様を仰ぎましょう。

６月１７日（火）マルコの福音書６章４５～５２節
「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」（５０節）

４５節で、なぜイエス様は弟子たちを無理やり舟に乗り込ませ、向こう岸のベツサイダに先に行かせたのかということですが、恐らく大勢の群衆のために休むことができず、逆にそれらの人々に食べ物を配る働きまですることになってしまった弟子たちに、イエス様の方が配慮されて、無理やりに舟に乗り込ませて、寂しいところで今度こそ休ませようとしたのでしょう。そして、イエス様の方で群衆を解散させられたということです。そしてイエス様は祈るために山に向かわれました。

４８節で「イエスは、弟子たちが向かい風で漕ぎあぐねているのを見て」とありますように、イエス様は、弟子たちの大変な様子を見ていてくださり、そして必要とあれば湖の上を歩いて、弟子たちのところへ行かれるお方です。私たちのこともイエス様はいつも見て、知っていてくださり、必要とあれば近づき、みことばをもって励まし、慰め、力づけてくださるお方です。そしてイエス様は「そばを通り過ぎるおつもりであった。」とあります。これはイエス様が近くでご自分の姿を見せることで、弟子たちにイエス様に頼る信仰を呼び覚まさせ、自然の力に対して自分の無力さを思い知らされる中にあっても、イエス様に対する信仰により平安をもって歩めるようになってほしいとの願いがあったはずです。私たちに対してもイエス様は直接的に助けることをなさらず、手を引っ込めたままということがあります。しかし、それは私たちの信仰を呼び覚まし、信仰を強めるとの主の深い意図があることを私たちも信じましょう。

しかし、湖の上を歩かれるイエス様を見て弟子たちは幽霊だと思い、叫び声を上げるほど、おびえました。なぜ彼らがイエス様を幽霊だと思ってしまったかと言いますと、そのような方とは一切認識していなかったからです。何度もイエス様の力あるわざを見せられたにもかかわらず、彼らはイエス様を正しく認識できませんでした。その理由として「彼らはパンのことを理解せず、その心が頑なになっていたからである」と説明されています。（５２節）私たちも、弟子たちのようにイエス様のことをなかなか理解できず、心が頑なで、信じようとしない者ですが、それでもイエス様は忍耐をもって私たちを導こうとしていてくださることは感謝なことです。イエス様による導きによって、イエス様を深く知らせていただく中で、心が柔らかくされ、困難の中にあってもイエス様の御名を呼び求める信仰を持たせていただきたいと思わされます。

６月１８日（水）マルコの福音書６章５３～５６節
「村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、人々は病人たちを広場に寝かせ、せめて、衣の房にでもさわらせてやってくださいと懇願した。そして、さわった人たちはみな癒やされた。」（５６節）

ゲネサレの地に着いた時に、彼らが舟から上がると、人々はすぐにイエスだと気づいたとありますが、なぜ人々がイエス様だと気がついたのかはよく分かりません。それはそれとして、今日の箇所を何度か繰り返し読む中で気がつかされましたことは、病人を何とかしてイエス様のもとへ連れて来ることで、癒していただきたいとの必死の、切なる思いです。まず最初が、「その地方の中を走り回り」ということです。二つ目が「病人を床に載せて運び始めた」三つ目が「衣の房にでもさわらせてやってくださいと懇願した」ということです。人々はここでイエス様なら必ず病気を癒やしてくださるとの信仰がありました。それともう一つが、イエス様は自分たちのような者であっても、決して見捨てることなく、あわれんで顧みてくださるとの信仰があったのでしょう。私たちの周りにもイエス様の救いを求めておられる方が大勢おられます。そのような中で、自分のような者はなどと言い、イエス様のもとへ行くことを拒む人もありますが、そのような人をもイエス様は顧みて救いを与えてくださると信じて、祈りつつ、イエス様のもとへお連れしたいと思わされます。

それとともに、「そして、その地方の中を走り回り」とありますが、人々は自分たちの家族や自分たちの住む地域だけではなく、地方中を走り回って、イエス様が来られたことを告げ知らせました。私たちも、なるべく遠くにまでイエス様の救いを告げ知らせ、救いにあずかる方がさらに起こされるよう祈ってまいりましょう。

６月１９日（木）　マルコの福音書７章１～１３

「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えによって歩まず、汚れた手でパンを食べるのですか。」（５節）

イエスの回りに集まったパリサイ人や律法学者は、イエスの弟子たちを罪に定めようとしました。それは「イエスの弟子のうちに、汚れた手で、すなわち洗わない手でパンを食べている者がある」ということのためでした。すべてのユダヤ人の家の玄関の近くに水の入った大きな石がめが置いてありました。それは異邦人が触ったものなどによる汚れを洗い清めるためのものでした。確かに旧約聖書には汚れから水を浴びることで身をきよめるとの規定はあります。（例としてレビ記１５章１～１２節など）しかしここで問題になっていることはパリサイ人たちが聖書の求めているところを超えてさまざまな規定を定めることで、人々の生活に余分な圧力を与えたことです。例えば食前に手を洗う儀式について言うならば、このような規定はもちろん旧約聖書の中にはありません。それはあくまで「昔の人たちの言い伝え」（３、５節）にすぎません。ですからイエス様も「人間の言い伝え」（８節）「自分たちの言い伝え」（９節）と言っています。ですからイエス様や弟子たちが反聖書的な行動を取っていたわけではなく、ただ単にパリサイ人や律法学者からすると、自分たちの言い伝えを無視したことが赦せず、そしてそのことが罪に当たると彼らは考えていたにすぎなかったのです。それと同時に「昔の人たちの言い伝えによって歩まず」とは、一体イエスの弟子たちは何を基準に行動しているのか、それを明確にせよということなのでしょう。回心する前にはパリサイ人であったパウロも、「また私は、自分の同胞で同じ世代の多くの人に比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖の伝承に人一倍熱心でした。」（ガラテヤ人への手紙１章１４節）と言っているように、先祖の伝承や人間の言い伝えを厳しく守ることで、パリサイ人や律法学者たちは、神を喜ばせ、神に仕えていると思っていたのです。私たちも、神のみこころでないかたちで歩んでいるにもかかわらず、自分は主に仕えていると思っていることはないでしょうか。私たちは、みことばを通して示される主のみこころに従うことによって主にお仕えしているでしょうか。

６月２０日（金）マルコの福音書７章６～８節
「この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。」（６節）

イエスは、パリサイ人と律法学者を「あなたがた偽善者」と呼び、その根拠としてイザヤ書２９章１３節を引用します。まず、口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れているところに偽善が現れていると言います。本来であれば言葉と心の両方をもって主を敬わなければならないにもかかわらず、イザヤの時代のイスラエルの民は、心が伴わない、かたちだけの信仰生活を送り、安息日に礼拝を行っていたのです。そのような偽善的な信仰は旧約の時代だけにとどまらず、イエスの時代にまで現れました。ここで私たちが教えられますことは、主なる神は、外見だけではなく人の心をも見ておられるということです。そして、心の伴わない礼拝、かたちだけの祈りに対しては偽善と言われ、「彼らがわたしを礼拝しても、むなしい」（７節）と言われるのです。なぜそのようになってしまったかと言いますと、神の戒めを捨てて、人間の命令を教え、人間の言い伝えを堅く守っているからです。

神の戒めを捨てるなら、必ず神から心が遠く離れます。それと同様に、もし私たちがみことばを捨て、みことばを読まず、みことぽに従わない信仰生活を送るなら、必ず心が神から遠く離れます。そのような状態で、いくら神を礼拝し、神に祈りをささげ、熱心に奉仕をしても、主の目には偽善としか映りません。私たちは、主のみことばを心に蓄え、それに従って日々歩んでいるでしょうか。主から「あなたがた偽善者」と呼ばれることはないでしょうか。

６月２１日（土）マルコの福音書７章９～１３節

「あなたがたは、自分たちの言い伝えを保つために、見事に神の戒めをないがしろにしています。」（９節）

パリサイ人や律法学者たちが偽善的で神の戒めをないがしろにしていることについて、ささげ物に関する言い伝えとその運用における問題点をイエス様は鋭く指摘しています。そう考えますと、イエス様は私たちの意識していないところをも見られておられることを思い、常に知れる罪も知られざる罪をも謙遜になって悔い改めていかなければならないことを思わされます。

ここでイエス様が例に挙げていることが「コルバン」（ヘブル語もしくはアラム語で神へのささげ物という意味）に関するものでした。コルバン（ささげ物）とは、「すべて自分の口から出たとおりのことを実行しなければならない。」（民数記３０章２節）との命令に基づいて、コルバンと宣言をすれば、お金が神に献げる以外に他の用途は一切認められないものとなりました。そして、コルバンとして献げられたお金や財産の所有者は神殿ですが、不思議なことに、そのお金の使用権は献げた人に与えられていました。ですから、コルバンと宣言して神殿に自分のお金や財産を献げる者たちには、二つの益がありました。まず一つが神殿に献金することで、周りの人々から敬虔な信仰者として称賛されることです。二つ目は、神殿に献げた富の使用権を行使して、自由にそのお金を使うことができるということです。神へのささげ物を言い訳に自分の貪欲を正当化させる、巧妙なたくらみと言えます。ですから、１１節にありますように、「もし人が父や母に向かって、私からあなたに差し上げるはずの物は、コルバン（すなわち、ささげ物）です。」と言えば、自分の親に生活費を渡さなくてもよくなり、そのお金は自分のために自由に使うことができたのです。本来であれば１０節の出エジプト記２０章１２節「あなたの父と母とを敬え。」との教えに従って、親を大切にすることを行動をもって示さなければならないにもかかわらず、人々の歩みは神のことばを無にし、「神の戒めを捨てる」（８節）ようなことを行っていました。そして、イエス様はそのことを知っておられ、そのようなことを偽善と言われたのです。

私たちの信仰の歩みには、偽善はないでしょうか。誘惑や罪に負けることで意識的に偽善的な歩みに進むこともありますが、無意識のうちに偽善が私たちの信仰の歩みに入り込むことがあります。そうならないためにも、決して神のことばを捨て去ったり、無にするようなことがあってはならないのです。